

IV. 高等部の研究

「働く」を通して育てたいこと

1. 高等部の教育

(1) 生徒の実態

今年度本校高等部には、各学年1学級ずつ1年生8名、2年生8名、3年生8名、計24名（男子12名 女子12名）の生徒が在籍している（うち1名は11月7日死去）。高等部としての規模は小さく全学年合同で学習することも可能である。毎年中学部から進学する生徒の他に、他校から2～3名が新たに入学してくる。他校から入学してくる生徒は主に特殊学級からで、中学部からの進学者に比べて能力的に高い傾向がある。全体的には、社会性や知的面また身体能力も一人一人違った個性豊かな集団で、その障害は様々である。知能検査に興味を示さない生徒も数人いるが、IQは20前後から50半ばまでであり、知的能力もある一定の範囲にまとまっていると言える。

高等部になるとそれぞれが自分の世界をもち、思春期とも重なって複雑な内的世界をもつようになる生徒もいる。いろいろな悩みや将来に対する希望、自分が楽しみにしていることなどを話題にして会話ができる生徒もいる。自己主張が強くなることから、表出言語がない子でもやりたいことや嫌なことがあると自分なりのコミュニケーション手段で強くアピールしてくる。改めて生徒一人一人の個性が明確になってくる時期である。

また生活経験を積み重ねて、学校や家庭において自分の生活を作り上げている。毎日、毎週、毎月、毎年の繰り返しの中で見通しをもち、行事を楽しみにしたり、不安に思ったり、予定が変わっても納得したりと同じ活動でも受け止め方は様々であるが、そこには必ず個々の成長を見て取ることができる。しかし知識では知っていても経験のないことは自分の生活の中の行動とは直接結びつかないようである。自分で経験をし、それが何らかの意味をもって初めて生活に位置づけられ、次の同じような経験をした時に、選択肢の一つとなると思われる。

本校の高等部も以前に比べ生徒の実態も多様化し変容してきている。しかし、どの生徒も可能性を秘めた日々成長する存在であると捉えている。

(2) 現行の教育課程

今年度の高等部の週時表は、表IV-1に示す通りである。

表IV-1 平成11年度 高等部週時表

学年	国 社 数 理 語 会 学 科	音 樂	美 術	保 健 体 育	作 業	生 活	全 校 集 会 鼓 笛 隊	レ ク リ エ ー シ ョ ン	ク ラ ブ	養 護 ・ 訓 練	計
1 2 3	5	2	2	2	8	7	4		1	2	33

週時表を受けての時間割は、表IV-2に示す通りである。

表IV-2 平成11年度 高等部週時間割

	月	火	水	木	金	土
1	全校集会	レクリエーション	鼓笛隊	全校集会	生活	生活
2	グループ	グループ	グループ	グループ	グループ	生活
3	音楽	作業	体育	音楽	美術	生活
4	養護・訓練	作業	体育	養護・訓練	美術	生活
5	作業	作業	クラブ	作業	生活	
6	作業	作業		作業	生活	

※養護・訓練、鼓笛隊、クラブは中学部・高等部合同で行う

「グループ学習」は国語・数学・理科・社会を主とするいわゆる教科学習で、高等部全員を能力別に4つのグループに分けてそれぞれの実態に応じて指導を行っている。

「作業学習」は高等部全員を印刷班、栽培班、彫刻・リサイクル班、製菓班、手工芸班の5班に分けて行っている。各班は能力的になるべく均等になるよう編成し、生徒は3年続けて同じ班にならないよう考慮している。

「レクリエーション学習」では、余暇利用につながる学習として「ウォークベースボール」や「いすとりゲーム」などの集団ゲームを行っている。

この他、時間割には表記されないが、本校独自のものとして「挑戦学習」と「ほんもの学習」がある。「挑戦学習」は、本校の高等部で過去20年にわたって行われてきた指導形態で、教師側が4~5の課題を提示し、生徒はその中から自分がやってみたいと思う課題を選んで挑戦する。提示してきた課題は各教科や生活に結びつくような内容から取り上げられ、その数は延べ200近くにのぼる。課題の練習期間は1~2週間で、グループの時間などを使って行い、その成果を高等部全員の前で発表して合否を問う。各学期に1回実施し、今年度の1学期には「折り畳み傘」「電話」「輪投げ」「ローマ字」「トランプ」の5つの課題が出された。（平成6年度紀要 参照）

「ほんもの学習」も学期に1回、教師が4~5の校外学習のコースを提示し、生徒が好きなコースを選択し、体験する学習である。できるだけ生徒が主体的に、協力して行うことを目指として、毎回 計画・実際の活動・報告 の時間をとっている。今年度の1学期には「健民プール」「JRに乗ろう」「市内周遊バスの旅～ホテルでバイキング」「映画」の4コースで実施した。また2学期には、生徒の希望するコースの中から「ショッピング」「カラオケ」「ボウリング」「映画」の4つを選んで提示した。（平成8年度紀要 参照）

なお資料として、巻末に 平成14年度から本格実施される新学習指導要領と本校の教育活動を対応させた 表IV-13を載せたので参照されたい。

2. 教育課程再編にあたっての視点

(1) 教育課程再編の理由

ここ十数年の間に、障害者の捉え方ひいては障害児の教育観は大きく変わってきた。1980年、WHOは「障害」を階層的に捉えるべく Impairment（機能不全）、Disability（能力障害）、そして Handicap（社会的不利）と3つに分けて用いることを提案した。現在、「障害」を人間の諸特性のうちで全否定されるような負の側面と位置づけ、その改善・克服に指導が収斂することに疑問を投じて Disability を Activity（活動）に、Handicap を Participation（参加）に改めることを決めた。WHOは障害者の「長所」を長所として認め、あるいは「強いところ」を見いだし、さらに伸ばすことにより、障害者が社会において自立的な生活を送るためにそれらを活用できることに、指導の力点が置かれるべきであることを説いている。¹⁾

このことは、今まで社会側から語っていた「障害」が、障害者自身によって語られ始めたのだと言うこともできるであろう。教育においても「自己選択」「自己決定」という言葉が重要視されているように、生徒に主体性をもたせる方向に進んできている。例えば前記の「挑戦学習」などに見られるように、本校でも生徒の意欲を重視して生徒自身が課題を選択するような学習が、以前よりも大きな意味をもつようになってきている。そのため従来の教育課程（1988. 2月刊）を見直すことが必要になり、今回の教育課程の再編となつた。

再編に際して私たちが最も大切にしたかったのは、その視点を教師側からばかりでなく、できるだけ生徒に寄り添い生徒側からのものにすること、教育の主体である生徒の実態からはじめることであった。

(下 野 令 子)

(2) 生活を構成する3つのカテゴリー

私たちは、生徒について話し合う機会を多く持つようにしてきた。研究に限ったことではなく、日々様々な場面での生徒の姿を語り合えるのは、学部の規模があまり大きくなうことにもよるが、先の時間割が示すように、教師が生徒を多角的に見ることができる環境にあるからだと思う。これまで、ある特定の場面だけではなく、様々な場面での生徒の話題を出す機会を多く持ってきたのだが、話題にあがる生徒の姿は、いくつかのカテゴリーに分かれしており、そのカテゴリーは学校生活でも卒業後の生活でも質的には変化することなく、ひいては人が生活していく上で共通のカテゴリーとなりうると考えるに至った。

それが以下の3つである。

学ぶ

具体的なもの、そこでおきている現象、そして指導者や学ぶ仲間といった人とのかかわりを通して、知的な欲求や好奇心を満たす活動であり、得た知識は生活で生かすことができる。

学習活動が系統づけられており、「わかる」「できる」が主たるねらいになるため、失敗経験や試行錯誤も貴重な学びのプロセスであり、それがあつてこそ得られる喜びも大きい。

働く

具体的なものへの働きかけを中心に、結果や成果を他者から認められたり、喜ばれたりする人とのかかわりを通して、有用性を見いだす活動である。制作した製品や行動そのものが他者の役に立っている喜びを感じる活動は社会や人とつながるきっかけとなる。

遊ぶ

具体的なものはもちろんだが、そこで生まれる現象を通して、おもしろさを追求する活動である。活動そのものが喜びであり、そこに集う仲間といった人とのつながりが深まる喜びにつながる。

この3つを学校生活の具体的な場面で考えてみよう。現行の学習活動を分類すると以下のようなになる。

表IV-3 「学ぶ」「働く」「遊ぶ」による科目的分類

学ぶ	グループ 音楽 体育 美術 生活 鼓笛隊 挑戦学習 ほんもの学習
働く	作業学習
遊ぶ	レクリエーション学習 クラブ 生活 挑戦学習 ほんもの学習 全校集会
その他	全校集会 養護・訓練

時間割には出てこないが、「働く」の中には、生活を自分たちで担う活動として、掃除や各種委員会活動、係活動（週番 当番）、行事等の準備もあげておく。

「学ぶ」は広い意味では、学校生活においてはすべての時間をさす。しかし上記の「学ぶ」は系統化された学習活動自体を目的としており、狭義の「学ぶ」と捉える。また「働く」中の「学ぶ」、「遊ぶ」中の「学ぶ」もあり、「働く」「遊ぶ」の充実が狭義の「学ぶ」にもつながっていく。つまりこれら三つは単独ではなく、相互に有機的につながり、個人の中でバランスを保ちながら広い意味の「学ぶ」となり、充実した学校生活や日々の生活へとつながる。

三つのカテゴリーの中の、もの、人はどのような活動においても対象として存在している。両者とのかかわりによって様々な現象が生起し再びものや人の対話へと循環が行われる。教師が一方的に説明し、伝達する旧来の学習ではなく、生徒自らが、もの、自分自身をも含めた人と生起する現象を通じてかかわりを深めていく学習がこれからの教育課程には必要である。²⁾

したがって、三つのカテゴリーを教育課程編成の柱に据え、学校生活において生徒が対象となるものや人とどのようにかかわり、対話を深めていくかを考えたい。

(能 岡 晶 子)

(3) 豊かな生活を支えるための教師側の姿勢

私たちは、生徒をどのような存在として捉えるかによって教育自体が変わると考えている。

まず、生徒を豊かな人間として捉えることが大切である。生徒たちの精神年齢は様々であるが、生活経験から培われた情操や思春期の複雑な感情、周囲の人々や異性に対する気持ちの変化などを考慮すれば、年齢相応の対応の仕方があるはずである。私たちは常に高校生を相手にしていることを忘れてはならないと考える。

次に、伸びゆく存在としての生徒の可能性を信じることである。将来の生活を想定して学習活動を一つの方向に絞るのではなく、多方面にわたる活動の中からその可能性を探っていきたい。作業では見つけられなかった生徒の長所や躊躇が挑戦学習で見つけられたり、その子らしさが遊びの中で見られたりすることもある。そしてそこから始まる支援があると考えている。高等部ともなると、新しくできることを獲得するのは難しいと考えられがちだが、そのため何かできたときには本人ばかりでなく教師や保護者にとっても驚きを伴う嬉しさがある。周囲の人が共に生徒の伸びを喜び合える環境は、自信や自尊の気持ちを育て、新しい活動への意欲につながると考えられる。

そして、充実した学校生活を送るその先に、卒業後の生活があると考えている。生徒にとって今の生活は卒業後の準備期間ではない。例えば、幼児が話すようになるのはある程度の言葉を獲得してからではない。話せない頃から意思を通わせようとする能力を精一杯使ってコミュニケーションを取ろうとする。それが音声言語の世界に結びついていくのである。生徒にとっては将来の姿を見通して、自分の今の課題に取り組むのは難しいことである。目の前の課題に一つ一つ取り組んでいくことで将来が開けてくると考える。

(4) 卒業後の生活する姿

卒業後、「働く」ことは生徒の生活の中で最も大きな割合を占める要素となる。働くことを生活の中心として、社会にかかわり、人やものにかかわることになる。そのためにも私たちは、生徒にとって「働く」ことが苦痛や嫌なことであって欲しくないと願っている。「働く」ことが何につながるかを生徒に伝えたり、「働く」を通じて自分に価値を見いだすことができれば、より高い目標に向かっていけると考える。

かつて卒業生の保護者から「学校で習ったことや経験したことを、なぞるように生活している」と言われたことがある。生徒の実態でも述べたように、経験したことがないければそれは生徒たちの生活にはないものと同じなのである。もちろん経験したこと全てが生徒の生活に取り入れられるわけではない。また卒業してからは何も獲得できないということでもない。しかしこの時期に、高校生としての生徒一人一人にいろいろな選択肢を示すことが必要なのではないだろうか。卒業後は「働く」ことが生活の中心になると考えられるが、それが生活の全てであっては「豊かな生活」とは言えない。例えば将来職場でうまくいかなくなってしまっても、仕事だけでなく他の何かを自分の中にもっていれば、自分の価値を別な方向で見つけることができるのではないかだろうか。

私たちは生徒一人一人に、学校で、ひいては社会人になっても、それぞれの実態に応じて「学ぶ」「働く」「遊ぶ」のバランスがとれた生活を送ってほしいと願っている。

昨年度は、「生徒が学びたいこと」と「教師が教えたいたこと」がせめぎ合うところに意義を求めて、「挑戦学習」を中心に「学ぶ」について研究をまとめた。今年度は、上記の視点から、「作業学習」を中心に「働く」について教育課程を見直すことにした。

(下野令子)

3. 「働く」

(1) 働くとは

「働く」と聞いてまず私たちの頭に浮かぶのは、その理念である。曰く「人間が人間として生きていくために最も大切なこと」であり「人間としての当り前の権利」である。実際には働くことで賃金を得て、消費生活を営んでいるため、よほど金銭的に余裕がない限り働くを得ない状況もある。また、仕事は付随する達成感や成就感、周囲からの評価によって、その人自身の生き甲斐にも、人生そのものにもなりうる。対価を期待できない家事も「家族の役に立っている」ということが実感できれば、やりがいのあるものに変わる。ボランティア活動も「誰かの、何かの役に立っている」ことがつながりとして分かるから、広がってきてているのだと思われる。

本校の生徒においても基本的には同じである。彼らにとって「働く」ことは、自分の生活リズムを作ることであり、社会にかかわっていくことである。一般就労でも、福祉就労でも、そこで自分の持てる力を出し切って仕事をしたり、いろいろな人とかかわることで、大人としての自らを確立していくことができる。自分で働いて得たお金は、たとえ少しでも誇らしいものである。そして、それらの根元には「自分が誰かの、何かの役に立っている」という思いがあつてほしいと願っている。

社会はかつて「障害者も社会参加を」とうたったが、今や障害者もまた社会を構成する一員であるという概念が浸透してきている。生産性を追い求める仕事ばかりでなく、かつては各家庭での役割だった老人介護などの福祉的な活動が「職業」として掘り起こされるなど、その範囲は広がってきてている。このように社会の職業というものに対する意識が変化する中で、学校現場の「働く」という意識も変わりつつある。

(2) 学校における「働く」

① 基本的な考え方

広義で捉えれば、学校で行う活動は全て「学ぶ」である。藤島岳は作業学習を「社会に出たときに待っている何らかの仕事への対処の手段として都合の良い学習形態」としている。³⁾ 狹義で学校における「働く」を捉えた時、私たちは第一の目的を有用性に置くことで、「学ぶ」とは分けて考えることにした。

ここでの「有用性」は「たくさん仕事ができた」「これだけ完成品ができた」という作業の結果に還るだけのものではない。自分に価値を見いだすという、生徒に還る「有用性」を求めていきたい。はじめは作業やその工程にかかわれなくても、その場にいられるだけでよい。なぜなら仲間と同じ場にいることは、一つのコミュニケーションの場にいることであり、ものや人との間で、自分の活動を理解していく過程の一つだからである。その後徐々に、作業工程にかかわり、自分の存在や活動が認められる経験を通じて、自分のポジションや役割が分かり、なくてはならない存在として自信もついてくる。その結果自分自身に価値を見いだせるようになると考えられる。

高等部の教育において作業学習は重要で、多くの意義がある。しかし、今学校で生活を

送っている生徒にとっては、作業だけが大事なのではないことを念頭に置いておきたい。

また、「働く」は作業学習だけではない。生活を自分たちで担う活動も学校における「働く」のもう一つの側面である。上級生として、生徒会をはじめとする委員会活動や各行事の準備などを行うことによって、働くことがみんなの役に立っている、喜んでもらえることを、より総合的に体験させたい。

② 「働く」における生徒の実態

「働く」における生徒の実態も、「働く」が「学ぶ」や「遊ぶ」と分化していない生徒から、自分なりの目標をもって作業に取り組める生徒まで様々である。

常同行動が見られたり物事にこだわる生徒にとって、作業学習は他の学習に比べて同じことの繰り返しが多く、自分のすることや状況が分かりやすいため、その場に長くいることができたり、情緒的にも安定して過ごせることが多い。自分が続けている仕事を通じて、教師に要求を出したり、友達とかかわる姿が見られることもある。

「仕事をする」という気持ちをもてる生徒にとっては、自信が育ちやすいようである。繰り返しの中でできることが増えるのは嬉しく、大人びた気持ちになるようである。自分が頑張っていることを意識したり、工程のどの部分に携わっているかを理解できるようになったりする。それぞれの役割を担う中で、友達がしていることを見て「同じことをしたい」と要求する生徒もいる。

日々の学習活動に見通しをもてる生徒は、目的がはっきりしていればいるほど積極的に作業に取り組むことができるようである。したくない仕事に対しては、態度や言葉で表すこともあるので、その仕事の意味を伝えることが必要である。中には失敗経験に敏感で、新しいことには尻込みする生徒もいる。自分のことより友達が何をしているかを見て、評価しようとする生徒も少なくない。

実態はそれに違っても、技術の習得が第一の目的では、長時間仕事の場に身を置いておくことは難しい生徒たちである。作業前の休み時間から集まっていて時間になって教師が行くと「先生、遅いよ」と注意をする生徒や、作業の場が別棟にあっても自分たちで移動してくる生徒など、作業を楽しみにしている生徒も多く見受けられる。

③ 作業学習でのポイント

これまで述べてきたように作業学習は指導形態の一つであり、技術の習得のみが最大の目標ではないため、作業種は特別に問うてはいない。とはいえ、週8時間もある作業学習なので、生徒にとってその時間はやりがいのあるものであってほしい。その意味において作業種は、生徒の可能ならば教師も含めて個々のタイプを生かせるものを考え、自分自身に価値を感じられるような活動を展開したいと考えている。

班の編成であるが、作業班は能力別にせず高等部全体を5つの班に分けて行っている。それぞれの班にいろいろな能力の生徒がいることで、班の中で責任をもつことを自覚できるようになったり、友達をモデルに活動への意欲や見通しがもてるようになったり、自分自身への振り返りにつながるようになったりすると考えているからである。

教師は「教える人」や「作業をさせる人」ではなく、生徒と共に作業をする人であり、

かつ生徒よりも高い視点で作業を眺められる立場の人でありたい。教師自身がその作業の有用性を意識することで、生徒によっては高い目標とその達成感を求めることができるようになる。

最後に、本校の特色を生かした作業にしたい。本校の建物は手狭で作業実習棟も無い。そのため大規模な作業はできないが、年度によって生徒の実態や教師の構成にあった作業を始めることができるなど、融通が利くのは利点であると考えている。各作業班も教師2人に生徒が4～5人と、生徒や教師のタイプを生かし、生徒の気持ちをつかみ取って作業ができる人数となっている。

④自分たちの生活を担うための「働く」活動

高等部ともなれば、学校生活のあらゆる場面で責任や役割を担って働くことが要求されてくる。そういった作業学習以外の「働く」を、自分たちの生活を担う活動として捉えることにした。時間割上には現れないが、学校における重要な生徒の活動の一つである。

その内容には、学級の当番や係活動、校内の清掃活動と生徒にとって具体的なものから、生徒の自治活動である生徒会をはじめとする各種委員会活動や、週番活動があげられる。さらに、学校行事の準備や後片づけも積極的に取り組んでいることの一つである。

自分たちの生活を担う活動の長所は、働いた結果が生徒にとって分かりやすいことである。特に行事では、主な活動が会場設営と撤去であるため、準備も後片づけも何につながるかがよく分かる。自分たちが設営した会場で行われる各種行事を通して、みんなのためにしている、みんなのためになっているということが体験できる。

自分たちの生活を担うための「働く」は、働くということを、総合的に見ることができる活動であるといえよう。

(下 野 令 子)

4. 「働く」の取り組み

(1) 作業学習の事例

印刷班

①対象生徒

A男（1年）B男（2年）C子（2年）D男（3年）E子（3年） 計5名
担当教官 2名

②作業を進めるにあたって大切にしてきたこと

主な作業の内容は、パソコンを使っての学校名入り「封筒の印刷」、本校製菓班のクッキーを包装する袋の「ラベル作り」、スタンプを使っての高等部各生徒の「タイムカード作り」、家庭との連絡に使う「連絡帳」の印刷製本（これは購買部で販売されている）、文書をスキャナーで取り込みデータ化・保存し、その後不要になったものをシュレッダーで処理する「印刷物処理」等である。

ここでの学習は印刷業界への就労のための技術習得を目的としたわけではない。

もちろん正しく紙を折ることや正確にスタンプを押す、簡単な機械を操作するなど基礎的な技能の習得は目標の一部においているが、同時に「働く喜び」を感じ「見通しをもって仕事をする」「報告する力」「他者との良い関係」などを身につけることを目的としている。

「働く喜び」 印刷班は「連絡帳」「日記」や「タイムカード」など高等部生徒の日々の生活にかかわる物を作る、なくてはならない作業班であり、バザーなどの行事においても食券や値札作りで縁の下の力持ちとして貢献している。このように他者に喜ばれる責任ある仕事をしているという自覚が喜びにつながると考える。

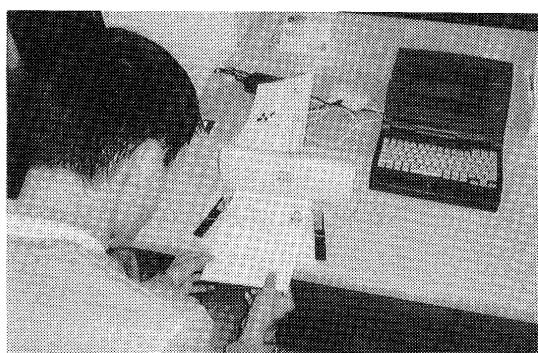
「見通しをもって仕事をする」 これはあらゆる仕事で必要とされることであるが、印刷班では紙折りやシール貼りなどの単調な作業をしなければならない場面が多く、しなければならない仕事量や自分自身のペースを考え、やり遂げることによって同時に持久力・集中力を身につけることができるのでと考えている。

「報告する力」 コンピュータでの作業中に不都合があったり、シュレッダーに紙を入れすぎて止まってしまうことがある。また仕事の終了など多くの報告が必要な場面がある。このような場合、自分で判断し状況を正確に報告する力が重要になってくる。

「他者との良い関係」 印刷班では連絡帳の作製など分担作業する場面が多く、一人の仕事の遅れが全体の進行を遅らせたり、逆に他者の仕事を援助することが自分の仕事を円滑に進めることができる。このような場面を経験することで他者との良い関係を築くことができるといえる。



連絡帳の製本作業



文書をコンピューターに取り込む

③取り組み 表IV-4

ね ら い	気持 ち	○失敗しないように集中しようという気持ちをもつ ○自分で目標を立ててやり抜こうとする気持ちをもつ ○自分の仕事の大切さを知り、責任をもって仕事をしようとする気持ちをもつ ○自分の仕事の成果を正しく評価する
	技 術	○貼る、切る、折るなどの作業の基礎的技術を身につける ○スタンプ、テープ、ホッチキスなどの使い方を知る ○コンピュータ・プリンター・穴あけミシン・裁断機など作業に必要な機器の使い方を知る ○紙や袋などの材質、特徴について知る
	関 わ り	○作業の中で自分の仕事を次の工程の人へ受け渡す ○全体の仕事の手順や役割を知り、班内でリーダーシップをとる ○他者の仕事が終わるのを待つ、また手助けをする ○終了・トラブルの報告をする
内 容		[封筒印刷・再生] コンピュータの起動、給紙・スタンプ・シール貼り [タイムカード] 番号・氏名のはんこ押し [連絡帳・メモ帳] 用紙の印刷、枚数数え、紙折り、製本（ホッチキス・テープ） [バザー準備] 食券・値札の印刷、ミシン目付け、スタンプ [製菓班包装] シール印刷、裁断、シール貼り [印刷物の処理] スキャナーでの取り込み、コンピュータ操作 磁石などの金属はずし、シュレッダー
働く 喜び		○自分たちの仕事に有用性を感じる ○自分の仕事に興味をもち、働くことに楽しさを感じる ○評価をうける、賞賛される ○無為に過ごすことなく有意義に時間を過ごす

④実践例

生徒 A男（1年）

実態

- 突然、興奮して自分を押さえられなくなることがある。
- つば吐きなどの行為に夢中で指示が通らないことがある。
- 作業の場所から飛び出してトイレにこもってしまうことがある。

ねらい

- 簡単な仕事の手順を覚え、意欲的に作業に取り組める。
- 作業場でのルールを知り、約束を守って作業に取り組める。

変容

作業のはじめの頃は、見通しがもてず興奮することが多かった。そこで最初はわかりやすいシュレッダーの仕事から始めたところ、つば吐きも止み、長時間作業を続けることができた。

その後もシュレッダーする前に紙からセロテープや磁石をはがす作業、スキャナーの中に原稿を取り込む作業をした。まだ正確さを要求される仕事は難しいが、仕事がなくなると教師に新しい仕事を求めるなど意欲的に作業に取り組めるようになった。またパンチで開けた穴にひもを通す作業など教師がA男には困難だろうと思っていた作業を難なくこなす面も見られ、落ち着いて作業ができることがA男の可能性を広げることになったと言える。これらの変容は「見通しがもてるようになったこと」「無為に過ごす時間がない」ことに大きな理由があるよう思う。

（荒木敏彦）

栽培班

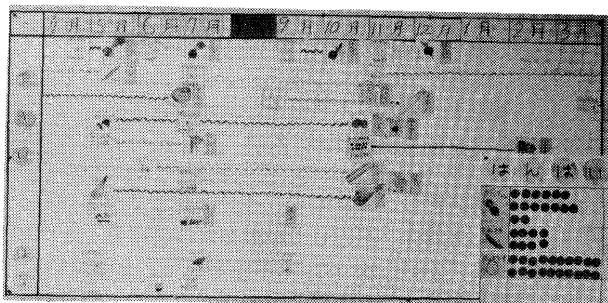
①対象生徒

F男（1年）G男（1年）H子（2年）I子（2年）J子（3年） 計5名

担当教官 2名

②作業を進めるにあたって大切にしてきたこと

- ・栽培班では小人数でまかなえるだけの狭い畑を耕作している。作物の選定にあたっては最大の楽しみである‘収穫’をより多く経験させたいと考え、収穫の時期が重ならない作物を少量ずつ育てるにした。また、年間計画表を生徒と共に作成し、一年間の見通しや栽培活動への意欲をもたせたいと考えた。



・年間計画表
・売り上げ表

- ・収穫した作物は収穫量が少ないこともあり、前年度までは各自が家庭へ持ち帰ることが多かったが、今年度はできるだけ‘販売’活動を取り入れることにした。販売を通じて人とのやりとりが増え、つながりが広がると考えたからである。また、収益があげられるという経験も働く意欲を高めるものとして大切にしたい。
- ・実際の作業では生徒自身が‘わかる活動’‘一人でできる活動’を心がけてきた。一工程だけのわかりやすい活動から、複数の工程がつながった活動や手指での微調整が必要な活動まで個に応じて担当を決めるようにした。自分の力でできる活動の積み重ねは自信を生み、働くことへ向かう個を育てるにと考えた。
- ・また、仲間と共に働くことを通して、つながり合い、育ち合う集団になってほしいということも願ってきた。時にはつらい畑仕事も仲間と一緒にやりぬけたという経験や‘流れ作業’の中で協力しあった経験が、互いを認め、尊重する気持ちを育てていると考えている。



さといもの袋づめ



グミの枝からの葉っぱ取りをするF男

③取り組み 表IV-5

ね ら い	気持 ち	○自分に任された仕事を責任をもって最後までやり遂げる気持ちをもつ ○がんばったことや工夫したことをほめられることにより成就感を味わう ○収穫の喜びや人から喜ばれる経験を通して働くことへの意欲をもつ
	技 術	○土運びや耕作など体全体を使って働くことを経験する ○収穫物の袋づめなどの単純な作業から種の直播きや苗ポットからの定植など手指の微調整を必要とする作業まで個々に応じて取り組む
内 容	屋 外	○耕地、畝づくり、苗ポットづくり、種蒔き、定植、肥料やり、水やり 草むしり、収穫
	室 内	○種用袋づくり、種取り、種の数をかぞえる、種の袋づめ 大きさの選別、重量を計る、袋づめ、販売
働く 喜び		○世話をした野菜や花が育ち、収穫することができた ○仲間と共に汗を流して働き、協力して仕事を成し遂げることができた ○野菜を買った人から「おいしかった」「ありがとう」と言ってもらえた ○収穫した物を調理して食べたり、収益金でごくろうさん会を行った

④実践例

生徒 F男（1年）

実態 • 働くという意識には至っておらず、教師と共に作業に参加する。

ねらい • 少ない援助でできる作業の積み重ねによって、働くことに向かう気持ちがもてるようになる。
• ほめられることによって働く喜びを経験する。
• 作業を通して人とのつながりを広げる。

変容 今年度から作業に参加するようになったF男。4月当初は他の生徒と同じ作業に取り組んでみたがかなりの部分で援助を必要とした。しかし、草むしりの後、雑草の袋づめに取り組んだところ、声かけだけでできることができた。
‘袋に物を入れる’活動はF男にとってわかりやすい活動のようであった。その後、さやえんどう・里芋など収穫物の袋づめ、種用の袋づくりでの紙片の片づけなどF男の活動は増えていった。質的に同じ活動なのでF男自身もスムーズに取り組むことができたようである。袋づくりが続くと、他の生徒から紙片の片づけを頼まれるのを待っているかのように時折、周りを見ていることもあった。席を離れることも少なくなり、質的に異なる作業～グミの枝からの葉っぱ取り～にも落ち着いて取り組む姿が見られるようになってきた。

F男の役割は次第に周りの生徒にも理解されるようになった。ある日、袋の台紙を切り取る作業をしていたG男がはじめて隣のF男に「する。」と言しながら紙片を渡し、捨てるように頼んだ。F男の役割がわかり、互いに認め合う存在になってきたようであった。 (原田絹子)

彫刻・リサイクル班

①対象生徒

K男（1年）L男（2年）M男（2年）N子（3年）O子（3年） 計5名

担当教官 2名

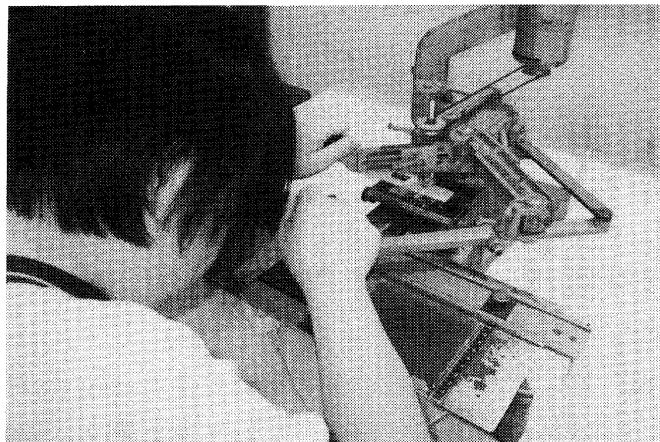
②彫刻・リサイクル班ができた理由

彫刻・リサイクル班では、現在「ネームプレートづくり」と「アルミ缶つぶし」の2種類の作業に取り組んでいる。

この2つの作業は、昨年度まではそれぞれ「彫刻班」と「木工班」の2つの班で取り組んでいた。しかし、木工班でアルミ缶つぶしの方が中心的な内容になり、班の名称と作業内容のズレが生じたことなどを受け、木工班を廃止し、アルミ缶つぶしは彫刻班の作業内容として行うことになった。それに伴い、班の名称も「彫刻・リサイクル班」に変えた。

③作業を進めるにあたって大切にしてきたこと

・ネームプレートづくりでは、字を彫る機械の操作（プレートのセット、針のつけ替え、文字サイズ等の各種設定調整など）や樹脂インクの扱いなど、技術的に高度な部分も要求される。しかしここでは技術の習得のみを目的とするのではなく、難しいことにチャレンジする姿勢や、それが達成された時の喜び、あるいは他者との連携を図りながら作業を進めることなどを獲得してほしいと願っている。また、自分達の製品が、校内の履き物入れや教室での名前表示、個人のキーホルダーなどとして利用されていることを自覚し、作業に対しての喜びにつなげるとともに、そのためには精確で美しい製品づくりを心がけるという姿勢も大切にしていきたいと考えている。



ネームプレートづくり

・アルミ缶つぶしでは、空き缶を提供してくださる方々への感謝の気持ちや、時には汚れていても嫌がらずに扱える態度、周囲と連携して作業に取り組む姿勢などを身につけることを重要視している。また、空き缶の再利用の過程を知り、つぶした空き缶のその後を考えることで、それが作業へのさらなる意欲づけとなるのでは、とも考えている。



アルミ缶の回収

④取り組み 表IV-6

影 刻		リサイクル
ね ら い	気持 ち	○完成品が利用される喜びを知る ○難しいことでもあきらめずチャレンジする姿勢を身につける
	技 術	○注文に応じて仕上げの内容・工程が違うことを知る ○精確で美しい製品づくりができる ○機械器具の操作や部品の取り付けができる ○インク埋め・インク取りに必要な知識や技術を習得する
	関 わ り	○工程間の連携をとり、点検や報告をしあう
内 容	【ネームプレートづくり】 ○字母を拾う ○機械を調整する ○プレートを選び機械にセットする ○機械で字を彫る ○インクを埋める ○シンナーで余分なインクをとる ○必要に応じてキーホルダーのリングや裏のピンをつける ○完成品を納品する ○ノートに記録する	【アルミ缶つぶし】 ○酒店から回収する ○アルミ缶とスチール缶を分別する ○アルミ缶をつぶす ○秤で2.5kg計り、ナイロン袋に入れる ○100kgたまつたら電話で連絡し、引き取りに来てもらう
働く 喜び	○自分たちの作ったものが実際に学校の履き物入れや机の名前表示に利用されていることが分かる ○注文してくださった方に製品を渡したら喜ばれた ○きれいに製品が仕上がりうれしい	○目標が達成できてうれしい ○自分たちの仕事が社会の役に立つのでうれしい

⑤実践例

生徒 L男（2年）

実態 •自分の思いが強く出すぎると他者の指示や助言が届かなくなることがある
•技術的に自信のないことを避け、容易な工程を担当しようとする面がある

ねらい •他者の言葉を冷静に聞き入れ、落ちついて作業に取り組む
•難しいことにもチャレンジする姿勢を身につける

変容 教師側がタイミングよく諭すように話すと彼も冷静に聞けることがあるので、「難しいことでも落ちついてやってみると結構できるようになるよ」ということなど、時間をかけていろいろな話をしている。

初めての現場実習（6月）の後に、「実習先の方にキーホルダーを作りたい」と言ってきた。実習中に実習先の方の名前をノートにメモして持ってきたのである。彼の中で他者への感謝の気持ちが芽生えてきたり、技術的に自信がもててきたりした証だろう。その後彼は、約10人分ものキーホルダーを作り、自分で実習先まで届けに行った。彼の「成長」が感じられた出来事であった。

(島田勝浩、田上和則)

製菓班

①対象生徒

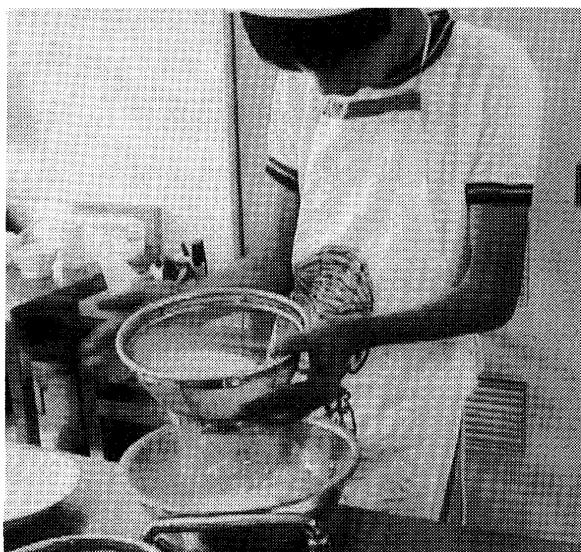
P男（1年）Q子（1年）R男（2年）S男（3年）T子（3年） 計5名
担当教官 2名

②製菓班ができた理由

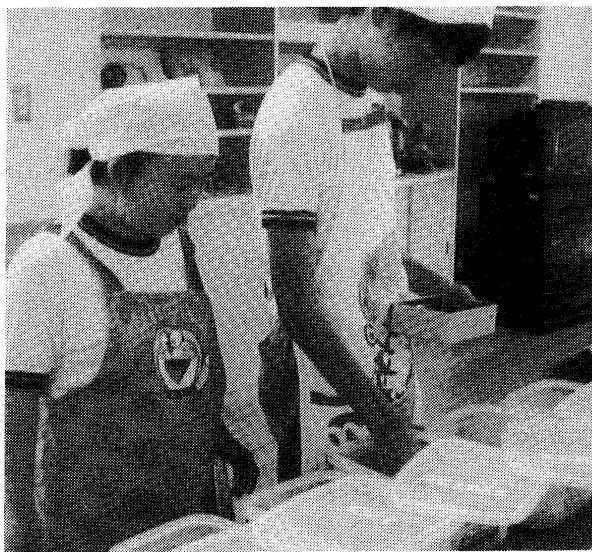
製菓班は今年度から新しくできた作業班である、一つには教師の思い（気持ち）が強かったからということもあるが、食べるものを扱う仕事ということで生徒も興味をもって取り組みやすいのではないか、作っていく過程で見通しがもちやすいのではないかと考えた。また、職場見学や現場実習などでいろいろな作業所へ行き、そこでの仕事の様子などをみても「クッキー作り」をしているところがいくつかあり、生徒と共にやってみたい、できるのではないだろうかと思い提案し生まれた班である。

③作業を進めるにあたって大切にしてきたこと

製菓班ではクッキー作りを中心に作業を進めて行くことにした。クッキーを作ることが初めての生徒ばかりであり、作業内容も細かい仕事がたくさんある。その中でもクッキーの生地作りの工程は繰り返し行うことで一人でできるように作業を進めた。また、食べるものを扱うので“衛生面”には特に気を付けるように心掛けてきた。作業の場面では、立ち仕事ということで「足が疲れた」「座りたい」という生徒もいる。その時は椅子に座って休憩を取りながらでもよいことにした。また、“座っていてもできる仕事”を振り分けることで嫌な気持ちにもならず、継続してできるようにした。作業をしていく中で“クッキーの販売”も考えていくことにした。販売をすることで一つの目標にもなり、相手がいることで「おいしいもの」「喜んでもらえるもの」を作りたいと思う気持ちや、販売することによって自分たちは「こんなこともできるんだ」という一つの自信にもつながり、作業が楽しいと感じられる気持ちをもち、仲間と協力して作っているという意識を育てたいと考えた。



クッキーの生地づくり



クッキーの袋詰め

④取り組み 表IV-7

ね ら い	気持 ち	○作業をしていることが「楽しい」と思える ○自分たちで作ったものを「おいしい」と言ってもらえるように作る ○作ったものが売れ、またおいしいものやよいのを作りたい
	技 術	○同じ作業を繰り返しながら、見通しをもって生地作りができるようになる ○計量ができるようになる ○包丁やミキサーの使い方を知り、使えるようになる ○準備や後片付けができる
	関 わり	○友達の工程を手伝う ○手があいたときのひと声（手伝いますか、次に何をすればよいですか） ○お互いに作り上げたものを認め合う
内 容		○材料や道具の準備 ○計量 ○生地作り ○袋詰め ○後片付け ○注文分配布
働 く 喜 び		○材料の準備で分量を一人で計れる ○作業工程について段取りが分かって作業を進められる ○自分たちの作ったものが売れたことがうれしい ○注文が増えてお客様に「おいしい」と誉めてもらえる ○注文配布時にお客さんから「ありがとう。またお願ひね」と言ってもらえる ○作業をしていることが楽しいと感じられる

⑤実践例

生徒 P男（1年）

実態 •一つのことに集中してするということがほとんどなく、周りの様子を気にしていることが多い。自ら行動することは少ないが、理解していることには指示がなくてもできるようになってきた。

ねらい •見通しをもちらながら作業が進められるようにする
•働いているという意識をもってできるようにする
•作業をしながら仲間と一緒に頑張って作ろうという意識をもつ

変容 クッキー作りは初めての経験で、ミキサーの使い方、小麦粉をふるう、混ぜる、計るという全ての作業が難しかったようである。また途中でやめてしまうことも多かった。ミキサーを使っているときや、混ぜているときなど他の生徒が何をしているのか周りの様子が気になり横を向いて手を止めてしまうことがたびたびあった。周りの様子が気になっていたのは「自分にもできるかな?」「してみたいな」という気持ちの現れでもあった。次第に自分から「包丁使ってみたい」「くるみ切りたい」というように自分の仕事の範囲を広げていく様子も見られた。作業を繰り返していく中で仲間の働く様子を意識しながら少しづつではあるが生地づくりが一人でできるようになってきた。また、クッキーを種類別にいれた箱の中から、一つずつとりだし袋に100gつめる流れ作業は最も苦手な作業でもあった。教師と一つ一つ確認しながら袋詰めをしていたが、Q子が「わたし一緒にするね」といってくれた。P男にはQ子に「次これ入れて」と教えてもらいながら袋詰めをすることができた。一人ではできないことも仲間と協力し合うことで進めて行けることも分ってきているようだ。作業をするにあたっても見通しがもてるようになり前向きに行っている。

(永山沙緒利)

手工芸班

①対象生徒

U男（1年）V子（1年）W子（2年）X子（3年 11／7死去）

計4名

担当教官 2名

②手工芸班ができた理由

昨年までは、縫製班としてミシンを使ってふきんや雑巾を作っていた。メンバーは女子で構成されており、ミシンの操作を伴うので一人で準備することが難しい生徒には教師の援助が必要であった。

今年度、作業班を作る際、誰もが参加でき指導者の手を借りずに生徒の力ができる事を考えた結果、縫製だけではなくもう少し範囲を広げようということで手工芸班と名前を改めた。

その中で、ビーズのアクセサリー作りにした理由は、

- ・生徒の能力に適している
- ・持続してできる
- ・自分たちも作ってみたいという気持ちをもてる
- ・教師の特技を生かしたものである
- ・教師と一緒に取り組める

以上の5点である。



③作業を進めるにあたって大切にしてきたこと

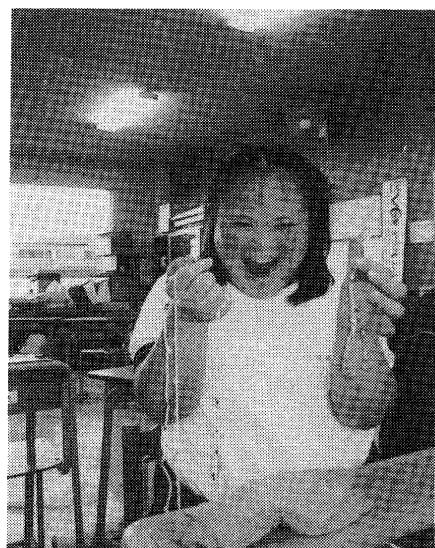
ビーズアクセサリー作り

・ビーズのアクセサリー作りという作業は、長時間細かいビーズを通すという根気のいる仕事である。また基本的には、一人の生徒が全工程を一人でやり遂げ完成させるものである。そこで一人一人が机で孤独に作業を行うのではなく、同じテーブルに座ってそれが作っている様子を見ることによって、みんなが頑張っているから自分も最後まで頑張ろうという意欲が出てきたり、お互いに励まし合う姿が見られるようになってほしいと考えた。

・作業を楽しく行うために、私語を手が止まらない程度に認めたり、クラシックなどの音楽をかけたりして、リラックスできるようにした。

・また仕上げた作品を見せ合うことによって、仲間同士で褒め合ったり自分も次により良い作品を作ろうという意欲につながれば良いと考えた。

・教師やその他の人から注文を受けて作ることで自分の作ったものが人に喜んでもらえるという意識をもち、それが作業への意欲につながって欲しい。



バザーで売れるかな

④取り組み 表IV-8

ねらい	氣持 ち	○ビーズを正しく通すことが良い製作品作りにつながるという意識をもつ ○ビーズ通しでくじけそうになった時、仲間の製作している様子を見て頑張ろう という気持ちになる ○仲間が困っている時に励まそうとする気持ちが育つ
ねらい	技 術	○デザイン図を見ながら正しくビーズを通したりテグスを操作したりできる ○製作過程に見通しをもつ ○自分でデザインを選択する ○テグスの操作によって様々なデザインができることを体得する
ねらい	関 わ り	○作業の準備、後始末を自主的に行う ○困難な状況や次の指示の要求を指導者に伝える ○皆で1つの作業をしている空間と時間を感じる ○他者の製作品にも関心をもつ
ねらい	内 容	1. デザイン決定 2. ビーズ選択 3. 必要なビーズ、テグス等の準備 4. デザイン図を見ながら製作 5. 仕上げ（パーツ取り付けなど） 6. 後片付け (製作品) ネックレス、ブレスレット、指輪、携帯ストラップ、ブローチ ○販売準備、袋づめ、販売、集計
ねらい	動 く 喜 び	○皆で同じ作業をしていることを楽しめる ○作る過程を楽しみながら少しずつ仕上がる事が分る ○作ったものを誉めてもらえる ○作ったものが売れる

⑤実践例

生徒 X子（3年）

実態 • 身近な人以外とはあまり接したがらず、皆と一緒に作業することは特に苦手である。

• ビーズの規則性はある程度分かり、大体正しく通すことができる。

ねらい • 技術はある程度あるので、かかわりの点で皆と楽しく一緒に作業ができるようになってほしい。

変容 少しづつ皆が作業するテーブルにX子の机を近づけていったり、X子の興味をひくようなストラップの本などを購入し製作に取り組ませた。その結果、自ら作りたいビーズアクセサリーの本やビーズを買ってきて、教師に「これを作りたい」と意思表示をしてきた。机も自分から皆のいるテーブルにくっつけて、そこで隣の生徒と時には話をしたりしながらビーズ通しをするようになってきた。

（柳生 美由季）

(2) 作業学習以外の「働く」

① 作業学習以外の「働く」の活動

本校高等部での学校生活全般をみると、「作業学習」だけが「働く」として捉えられるのではない。特に時間割には表れてこないが自分たちの生活を担う活動として、特別活動の中のホームルーム活動、生徒会活動、学校行事も「働く」の中に含まれるものと思われる。具体的には、日常行われている掃除、係活動（週番、当番）、それに各種委員会、運動会、表現会、バザー、卒業式などの行事の会場準備、後片付け等である。

作業学習以外の「働く」として考えられる取り組みについてまとめてみる。（表IV-9）

表IV-9 作業学習以外の「働く」

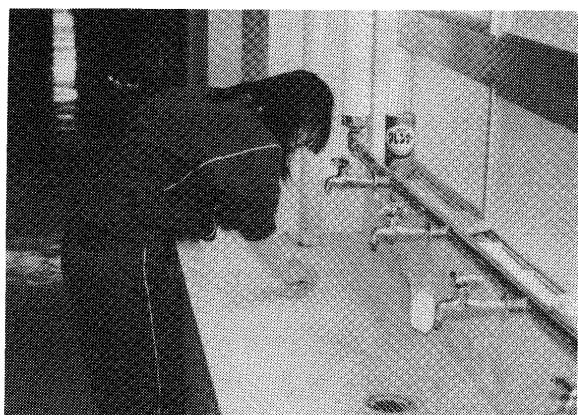
ホームルーム活動	当番 掃除 クラスの係活動
生徒会活動	各種委員会活動（生徒会・整美・体育・飼育・保健・掲示・購買） 週番活動（6班に分けて週毎に活動）
行事の準備・後片付け	4月 生徒会役員選挙 5月 創立記念日・運動会 8月 登校日 11月 表現会・意見発表会 12月 バザー 2月 教育研究会 3月 卒業式

② 大切にしていること

作業学習以外に「働く」という観点から見ると、学校生活には多くの「働く」がある。

毎日の係活動などの身近なこと、それに、学校行事への取り組みにも「働く」という要素が含まれている。自分たちの生活や行事を自分たちでという気持ちや人とのかかわりの中から「働く」ことの意義を知ってほしいと考えている。

もちろん「働く」の中には、役割を担っている、繰り返し行うことで見通しをもって主体的に取り組める、人に認めてもらう、成果が人の役に立っている、ということも含まれている。



保健委員の仕事



バザーの準備

③取り組み 表IV-10

	気持 ち	○他者を思いやる気持ちが育つ ○係活動など役割を明確にすることにより責任をもって取り組める ○自分達の行事を自分達で作ろうとする意欲をもつ ○上級生としての自覚をもち後輩の活動を支えていることを意識する
ね ら い	技 術	○拭き掃除、掃き掃除、机の整理整頓などができる ○各委員会の役割や仕事が見通しをもって取り組める ○けがや事故にならないように気をつけて活動する
	関 わ り	○重いものを持ったときなど他者の仕事を手助けする ○経験を積む毎にリーダーシップがついてくる ○お互いに協力しなければできないこともあることを知る
	内 容	○掃除（拭き掃除、掃き掃除、整理整頓等） ○当番、係活動（朝礼・終礼の当番、クラスの係仕事） ○各種委員会活動（整美、体育、飼育、保健、掲示、購買、生徒会） （体育用具の整理、水やり、餌やり、洗面所洗い、校内掲示、物品の販売 行事の企画・進行・運営等） ○週番活動（週毎に活動） ○運動会、表現会、バザー、卒業式などの会場準備後片付け（椅子運び、椅 子並べ、舞台作り、荷物の移動等）
働く 喜び		○自分達の行事を会場準備から手がけ、自分達が主役だという意識をもつ ○最高学部であり自分たちや後輩の活動の場を整備したことに誇りをもち先 導役になっていることを知る ○よくできたと感謝される（誉められる）

④生徒の様子

保健委員での日々の取り組みとして、クレンザーとタワシを使っての手洗い場の清掃が昼休みにある。どの場所を誰がという役割を明確にしたことと、いつもよくやってくれていると感謝され誉められることで、「働く」喜びを知り責任をもって取り組んでいる。

行事などの椅子運びや片付けなどは、経験を積むことにより特に声掛けがなくても自分たちでできるようになったり、協力して取り組む気持ちが表れるようになった。

その他として、卒業生の運動会などの行事への参加の仕方を見ると、本校独自の「働く」も含めた参加の仕方をしているよう思う。競技に使う用具の出し入れ、生徒の誘導、また、用具、テントの後片付け等を率先してやってくれる。この光景は、在学中の生活で培ってきたものを活用したり、また、先輩たちの様子を見たり、実際に経験することにより「働く」「参加する」という喜びを得ているようである。学校とのつながり、人とのつながり、また、自分が役立つ喜びが多く見られる「働く」の場面である。

(寺澤聰)

5. 進路指導の視点からの「働く」

本校の進路指導は主に「現場実習」「進路学習」「進路相談」の3つで構成している。指導計画については表IV-11のとおりである。

表IV-11 本校高等部の主な進路指導計画

	1学期	2学期	3学期
1年		10月 職場・施設見学（保護者同行で卒業生の進路や2年生の実習先を見学）	
2年	6月 第1回現場実習（1週間）	10月 第2回現場実習（1週間）	1月 職業適性検査（一般就労希望の生徒対象で職業センターで行う）
3年	4月 職業相談（一般就労希望生徒対象に保護者、ハローワーク、教師の4者面談） 6～7月 第3回現場実習（2週間）	10月 第4回現場実習（2週間） 10月 施設説明会（福祉就労希望生徒と保護者対象に市障害福祉課職員と4者面談）	

*現場実習毎に学部全体で壮行会を行う

表IV-12 本校の進路状況（数字は卒業時の人数）

	平成6年度		平成7年度		平成8年度		平成9年度		平成10年度	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一般就労	3	2	1	1	1	0	2	1	0	0
福祉就労	4	1	3	2	3	3	3	4	5	3
能力開発校			0	2	1	1	0	0	1	0
その他	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
計	10		10		9		11		9	

・一般就労の業種内訳

「食品」2 「清掃」2 「花卉」2 「縫製」1 「リネン」1

「サービス」1 「その他の製造」2 計11人

このうち在学中の作業グループと類似した業種に就職したケースは2件

（花卉と縫製の各1件）

・福祉就労の内訳

「更生施設」5 「授産施設」26 うち入所1

・石川障害者職業能力開発校

知的障害者を対象とする生産実務科で1年間の訓練

・その他

主に病気療養

(1) 「現場実習」について

リネン、清掃、食品加工など、全国的に見てもこれまで知的障害者の就労先としては代表的な業種を中心に職場開拓してきた。仕事量が多く期間を通じて変化のない、いわゆる単純作業がほとんどである。一般就労数（表IV-12）が景気の動向に直接的に関係しているとはいえない。一般就労を希望した生徒のうち、その適性に問題がない限り卒業の時点で就職を決定している。ただ、今まで現場実習の承諾を得ていた上記のような業種の事業所にも、ここ数年「仕事がない」等の理由から断られるケースが増えてきた。雇用を前提とした場合はよりきびしい状況である。

「現場実習の多様化」

これら障害者をとりまく社会情勢の変化に伴い、今一度保護者や生徒自身の希望を見直す時期にきている。小学部の児童の面倒を見たり移動が難しい友達のお世話をするのが好きな生徒がいる。「看護婦になりたい」「保育所で働きたい」等、今まで夢物語のように扱ってきた言葉をある程度受けとめ、可能性を模索する方向で現場実習を進めることにした。

・保育所、病院、老人施設での現場実習

今年度から保育所や病院・老人施設で現場実習を計画・実施した。実際の業務内容としては主に掃除・洗濯やベッドメイクであるが、生徒や保護者の求める「人とかかわる」機会の多い職場である。まだ雇用には結びついていないが、受け入れ側の障害者への理解という点でも意義のある試みと考える。

・ショートステイ

卒業後の生活をより現実的に想定した形での現場実習を、保護者が希望するケースが増えてきた。実際には通勤寮から職場に通ったり、入所施設でショートステイの制度を利用したりという形での現場実習を計画・実施した。

・ジョブコーチ

従来、実習期間中の巡回指導は2日に1度、教師が30分程度、生徒の様子を見てくる形式で行ってきた。ここ2~3年、教師がジョブコーチのように一定期間、半日程度生徒と一緒に実習するケースもでてきた。主に表出言語がなかったりパニックになりやすい生徒が福祉施設で実習した場合である。他にも病院等のベッドメイクのパートナーとして教師が一緒に働いたケースもあった。受け入れ側に生徒の特性を理解してもらい、教師側も現場が求めていることを知る機会となっている。

(2) 「進路学習」について

技術的に作業はある程度できても「働く」ことの意味の理解が不十分な生徒については、仮に保護者が一般就労を希望しても雇用に結びつくケースは希である。職業意識とまではいかないが、在校中に「卒業後の仕事や生活」を考えることは福祉就労する生徒にとっても大切なことと考え、進路学習を取り入れた。

・進路の授業

現場実習の事前指導を中心にクラス単位（生活の時間）で行ってきたが、今年度からグ

ループ学習の時間に進路学習を週1時間試行している。「施設と作業所のちがい」「各業種の特徴」「職場でのマナー」「将来の夢」等を生徒同士が話し合う形で行っている。教材として職業センターよりVTRを借用している。年間を通して授業時間を確保できたことにより今まで十分といえなかった現場実習の事後学習も充実し、反省点も生徒にフィードバックできるようになってきた。

・先輩の話

卒業生を招いての講話も随時行っている。「給料はいくらですか?」「勤務時間は?」という質問も在校生から出てくる。「○○先輩のように」「××の仕事がしたい」という意識も芽生え、自分の将来と重なり合わせる良い機会となっている。

(3) 「進路相談」について

上記の項目の中で記したように、進路相談は生徒や保護者を対象に様々な形で行っているが、卒業生においても可能な限り対応している。本校では毎月「兼友親子の集い」という青年学級を実施しており、職場訪問と同様、卒業生の情報を知る機会となっている。離職の問題については、ケースに応じてハローワークや職業センター等とのネットワークを利用し対処している。表IV-12の一般就労者の中にもリストラにあった例が3件あったが、関係諸機関の協力を得て再就職している。

(4) 進路指導にあたって

作業学習は進路先や実習先を決めていく際、生徒の得意なことや必要な援助の方法を発見できる時間の一つである。座った仕事、立ち仕事という観点での適性も見えてくる。

進路先での主な作業内容として「容器の洗浄」「箱折り」「タオル畳み」「清掃」「割り箸の袋づめ」「ネジ締め」等がある。これらは扱う品こそ違うが、小学部段階から遊びや図工、生活単元学習等の中で身につけてきた切る・貼る・塗る・折る・並べる・ちぎる等がスキルとなっている。また在学中作業学習で箱折りの経験のなかった生徒が、入所後2年ほどすると手元を見ないでも次から次へ箱を折っていく例もよく見る。

むしろ適性という点で考えれば作業学習だけでなく、掃除の時間や行事の準備、教科学習、その他の生活全般において、進路を考える上でたいへん参考になる発見が多い。母親思いのA子は、年輩の女性スタッフに囲まれたビル掃除会社に就職した。炎天下、陸上部の練習に頑張っていたK男は、真夏でも爽やかな表情でリネン工場で働いている。

生徒は卒業後一般就労、福祉就労にかかわらず、働くことで社会に参加していく。企業や施設に進んだ卒業生を見ると「働く」ことを通して良い意味で大人として扱われ、人の接し方や仕事に対する心構えを身につけ成長していっている。

作業学習は進路先に入ることを目的にした技術訓練のみの場では決してない。在学中、作業学習等で「働く」ことに体も心も慣れ、「働く」ことの気持ちよさを十分経験しておくことが大切であると考える。

(山 崎 晴 生)

6. まとめ

高等部の教育課程再編にあたって昨年度は「学ぶ」活動について、「挑戦学習」や「グループ学習」を取り上げ実践研究してきた。今年度は、「作業学習」「作業学習以外の働く活動」「進路指導」を通して、「働くとはどういうことか」「何を大切にし、将来につなげていくか」、その教育目標や教育内容等はどうあったらよいのだろうかといった事柄についてこれまでの実践研究を見つめ直し検討することにした。

（1）心と生活の豊かさを育てるための3つのカテゴリー「学ぶ」「働く」「遊ぶ」

国際障害者年を契機に、「社会参加と平等」「バリアフリー」「ノーマライゼーション」「自己選択・決定」などといった言葉を見聞きするようになった。それからかなり年数が経った今日、それらの実現に向かって、関係機関や社会での取り組みが行われてきている。それと同時に、従来の障害者観も見直されるようになった。すなわち、「障害者は、他の市民とは異なったニーズを持つ特別の人と考えるべきではなく、通常の人間的ニーズを満たすのに特別の困難を持つ普通の市民である」と捉える障害者観が今日徐々に受け入れられ理解が促進されてきている。」とは言え、まだ旧来の障害者観に基づく誤った対応が社会問題になっていることもある。本校でもこうした基礎的認識に基づいてこれまでの教育課程を再編成している。

高等部では、ほとんどの生徒がもっているであろう「通常の人間的ニーズ」を満たす教育活動を探り入れるように努めてきた。「ほんもの学習」「挑戦学習」その他の教育活動でもできるだけ選択肢を準備し、生徒が自己選択・決定でき主体的に学習を進めていけるよう支援してきた。これらの学習を通して、生徒は確かに選択できるようになってきたし、それに伴う満足感、充実感、責任感を味わい、チャレンジ精神も培ってきたようだ。生徒が楽しく遊んだり学んだりすることがいかに大切な教師にも再確認できた。保護者もこうした学習の意義を理解し、「現在及び将来につながる生活のレパートリーが広がった。もっとやってほしい。」と言って支持してくれるようになっている。

従って、「通常の人間的ニーズ」を満たすためには、「学ぶ」「働く」「遊ぶ」といった3つのカテゴリーで構成する教育活動が、バランスよく整えられ展開される必要があると確信する。これが、生徒の現在及び将来にわたって豊かな心と生活づくりを支援する教育課程になるとを考えている。

（2）「働く」を通して育てたいこと

今年度研究してきた働く活動は、遊ぶ・学ぶと同じく、本来、楽しく充実感の伴う活動であると考える。ただし、活動の中身が楽しく、やりがいのある、見通しのもてるものであること、また、教師や周りの友達とのかかわりでは、尊重され、認められ、協力し合うものでなければならないこと、まして、教師が生徒に指示・命令し、強制させて行う活動や関係であってはならないことを確認してきた。例えば、「指示されないと作業ができない子」と決めつけるのではなく、「その子にとって指示されなくてもできる魅力ある作業や作業工程とは何か」「教師の指示に代わる良い方法はないだろうか」と教師側が考え、

参加できる状況づくりに努めてきた。私たちは、これらのこととを実証するため、個々の生徒の気持ちに寄り添いながら、指導内容や方法・人とのかかわり方について教師間で話し合ってきた。

働く活動は主に作業学習で行われているが、それだけに留まらず、日々の清掃や係活動、運動・学芸行事などの準備・後片付けなどの場面でも行われている。それらのあらゆる場面を通じて、作業技術の習得のみならず、それ以上に働くことの喜びや満足感・充実感を味わい、また、人から有用と認められる経験を積み重ねていくことが大切であると考えてきた。このことについては、実践例から読み取っていただければ幸いである。生徒も教師も共に楽しみ、学び、認め合いながら働く活動に取り組んできたつもりである。

余談になるが、毎年行われる運動会や表現会に卒業生が参加してくれるが、活動が終わると、必ずといっていいほど彼らが当たり前のように率先して後片付けをしてくれるのである。本当にありがたく、良く育っているなと感心する。そんな働く姿が在学生にも受け継がれていっているようだ。今や本校の伝統となっていることを付け加えておきたい。

（3）進路の学習は「生き方」学習である

2年生・3年生の現場実習を積み重ね、徐々に卒業後の進路を決定していく。進路指導は、生徒本人・保護者・教師が密接な連携を取りながら進めている。まさに将来の生き方に直結するだけに、慎重に個々の生徒の「特技」「特徴」「働く意欲・態度」「性格」、そして保護者の「要望」「家庭の実態」などを十分考慮して決定している。

このため、卒業生の話を聞く学習、どんな仕事をしたいかの希望調べ、生徒の特技を活かすための職場調べや職場開拓、ジョブコーチの取り組み、ショートステイを取り入れた現場実習など、個々の生徒の実態に合わせた取り組みを隨時・積極的に行ってきました。

近年は、一般就労・福祉就労・施設入所・職業能力開発校進学など選択肢は以前に比べれば多くなってきているがそれだけ自己選択・決定が求められるわけで、生徒本人はもとより保護者の理解・認識の取り組みも重要な課題となってきた。その子なりに生きがいをもって生活できる将来の姿を三者が一体となって模索している。

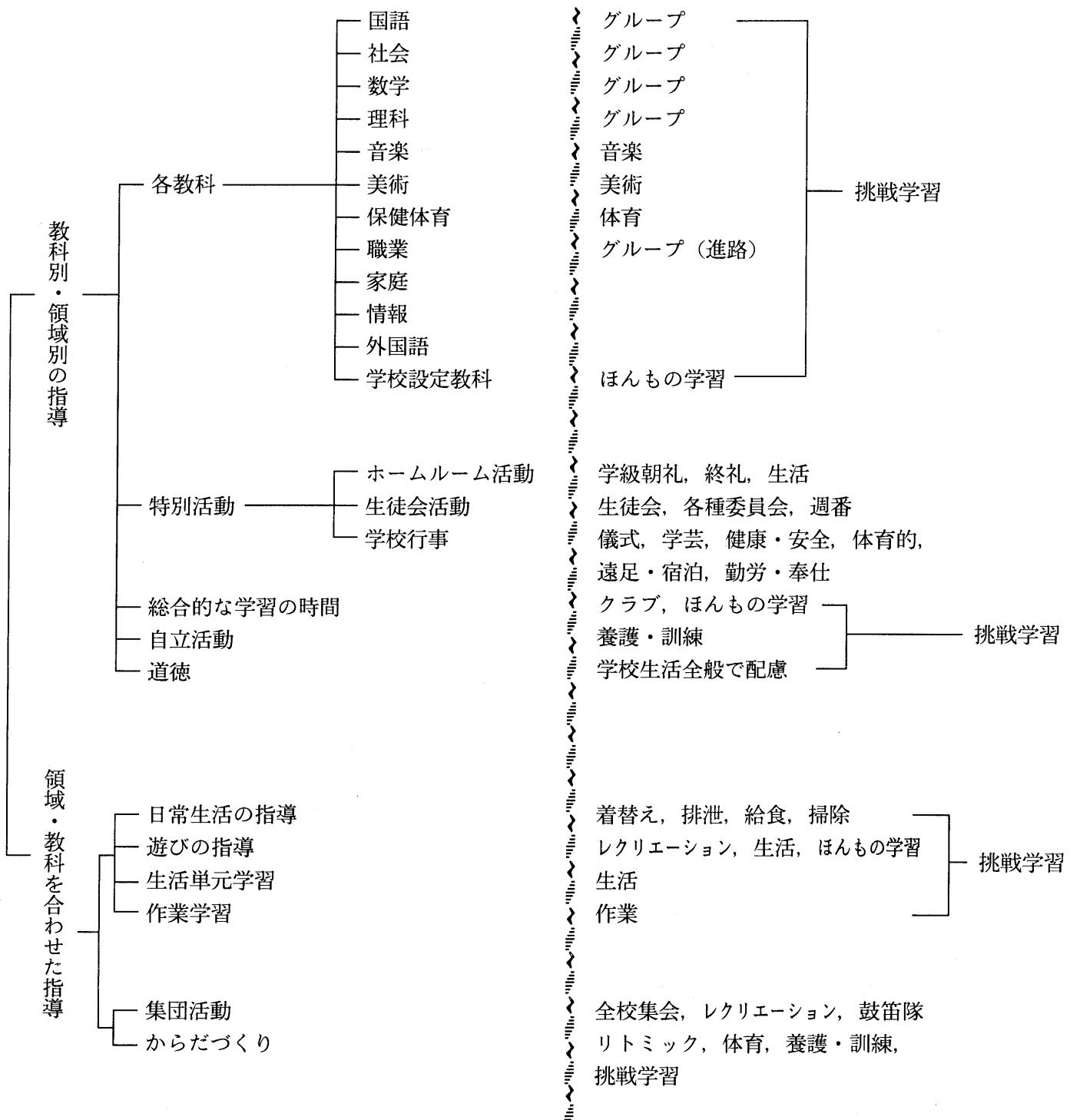
（4）今後の課題

「働く」について実践研究してきたが、まだ多くの課題が残っている。1つ目は、個別指導計画を作成して、個々の生徒について指導目標や内容・方法を確認しながら指導を進めていきたい。2つ目は、生徒の可能性をもっと引き出すための作業学習のあり方について検討していきたい。3つ目は、子どものことや進路先について正しい理解や認識をしてもらえるよう、保護者に対してさらに働きかけていきたい。4つ目は、事業所や作業所と連携をとりながら外部からの客観的評価も得つつ作業学習を充実していきたい、等々である。

先日バザーが開催された。会場作りの準備から、当日の運営、後片付けに至るまで高等部の生徒が中心になって行った。作業学習で日頃から製作してきたものが即売で飛ぶように売れた。食堂部でも生き生きと店員さんとして働いていた。生徒達のちょっと疲れたけれど成し遂げた喜びの表情が、将来の姿を見るようで私たちには嬉しかった。

（辻 俊）

表IV-13 新学習指導要領と高等部の教育活動との対応



参考文献

- 1) 篠原吉徳 「障害児の授業研究N o. 72 「WHOの考えに沿う学習障害児への指導」 明治図書(1997. 7)
 - 2) 佐藤学は、これまでの学校教育が忘れてきた本来の「学び」を取り戻すために文化の伝承の観点からモノ（対象世界）と他者と自分との対話的実践として「学び」を定義づけている。
「学びの身体技法」太郎次郎社(1997)
 - 3) 藤島 岳 「C R O I R E 作業学習」 日本教文社(1994)
 - 4) 「障害者対策に関する長期計画」後期重点施策 障害者対策推進本部(1987. 6)